

## 詩編 121 篇

## 神は民を親しく気遣われる

## 歓迎と導入

大阪インターナショナルチャーチの皆さんこんにちは。私はアリスティア・マッケンナと申します。数年 OIC に通っておられる方でしたら私をご存知かと思えます。もしも最近来られた方がいらしたら自己紹介しなくてはなりませんね。私は、OIC で 5 年間主任牧師としてお仕えし、約 16 か月前の 2020 年 2 月 28 日、まだ英国が封鎖される前に日本を経ちました。神は私と妻のウエンディを帰国するように導かれたのですが、皆さんに会えないのはとても寂しく、皆さんのことを忘れたことはありません。私も妻も、OIC ではクリスチャンとしての働きの中でも最高の 5 年間を過ごし、また皆さんが引き続き私たちのために祈ってくださっていることに感謝しています。私たちは現在、英国デヴォン州エクセター市にある、聖トマス・バプテスト教会の教会員です。この説教はその教会の建物で録画しています。現在の OIC の大変な状況を覚えて私たちもお祈りしていますが、同時に神様が皆さんのためにご計画を持っておられることもわかっています。

エレミヤ 29:11 「29:11 わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——【主】の御告げ——それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

トッドさんから 2 回の説教を依頼され、録画した説教を日本に送ることが決まった時、最初の説教の中心聖句としてすぐに私の心が向かったのは詩編 121 篇でした。詩編 121 篇は、たくさんある聖歌の中でも聖書で「都上りの歌」と呼ばれているものです。また「巡礼歌」とも呼ばれています。その理由はこれらのヘブル語の歌が、ユダヤの主要な祭りを祝うためにエルサレムに上る際、その旅路で歌われたものだからです。エルサレムにたどり着くには、イスラエルのどこからでも急な坂を上っていなければなりません。ですから、「上り」というのは上がって行くということを意味しています。旧約聖書の時代には、敬虔なユダヤ人たちは皆、人生のうち少なくとも一回はエルサレムに巡礼に行きました。人々は隊商と呼ばれる大きなグループとして旅をしました。旅路は暑さや渇き、飢え、病気、事故や強盗など、多くの危険にさらされていました。夜間に宿営する際には、近くの丘に見張りを設置し、予測し得る攻撃から身を守りました。この詩編が書かれたことにはこのような背景と体験があるのです。原語のヘブル語訳では、この詩編の中で中心となる言い回しが 6 回ほど出てきます。英語ではそれが「God keeps (神は～させず)」もしくは「God preserves (神は～守られる)」と訳されています。今日の主要テーマでもあるこの詩編の 4 つの重要な真理はここから来ています。

1. 神は私たちを守られる(1-2 節)

この詩編の著者は、自分の助けが神から来て、頼りは神にあると告白しています。そして続けて、なぜ神に完全に信頼できるのか理由を述べています。

神に信頼できるのは、神が天と地の創造主であるからであると。聖書の神は、ご自身の造られた万物を絶対的に支配されています。神は、私たちを守る権力と御力をお持ちなのです。善良な人々にも悪いことが起こるものですが、神はそれでもすべての人の上に絶対的な支配と力をお持ちです。神はただ、ご自身の主権のうちにある目的のために物事が起こることをおゆるしになるのです。人生を振り返った時にやっと、私たちの霊的な旅を神がその御手で支えてくださっていたことが分かるものです。

私は、最近 100 ページほどの小さな本を書き上げました。今までの人生で神に従うべく歩んだ私とウエンディの天への旅路において、神が御手を据えて守ってくださったことを伝える本です。その本をお読みになれば、神がご自身の約束を守り、ご自身の民のために

備えてくださるということがただ1つ明確に分かってもらえると思います。神は天と地の造り主ですから、それがおできになるのです。神が私たちを守られるには、2つ目の理由があります。神が私たちを守られるのは、神が「契約を守られる神」だからです。神は、ご自身が選ばれた民、ユダヤの民と契約の関係を築かれました。

創世記 17:1-8 「17:1 アブラムが九十九歳になったとき【主】はアブラムに現れ、こう仰せられた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。17:2 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたをおびたしくふやそう。」 17:3 アブラムは、ひれ伏した。神は彼に告げて仰せられた。17:4 「わたしは、この、わたしの契約をあなたと結ぶ。あなたは多くの国民の父となる。17:5 あなたの名は、もう、アブラムと呼んではならない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしが、あなたを多くの国民の父とするからである。17:6 わたしは、あなたの子孫をおびたしくふやし、あなたを幾つかの国民とする。あなたから、王たちが出て来よう。17:7 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである 17:8 わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンを、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」

当時、契約が二者間で結ばれる際には、動物を真っ二つに切り裂き、両者がその切り裂かれた動物の間を一緒に歩き、契約のしるしとしました。それは、どちらかが契約を破った時に、その人はその動物のように真っ二つに切り裂かれ得る、ということ象徴していました。けれども、創世記 15 章に戻って 7-21 節を読んでみると、アブラハムは切った動物の間を歩くことを求められなかったことがわかります。神ご自身だけが、そうなさいました。それは、契約を守る責任は、神ご自身が負われるということです。これは、神が私たちを守ってくださるといふ、恵みの契約なのです。この契約は私たちの手柄や価値に基づいたものではなく、神の民に対する契約の愛に基づいています。今日 OIC で礼拝する私たちにとっての神との契約は、私たちの罪のために十字架につけられ、私たちの身代わりとなり、代わりのいけにえとなったイエス・キリストの働きに基づいているのです。

コリント第二 5:21 「5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」

私たちの神との関係は、イエス・キリストがご自身の死のうちになされたことに基づいているのですが、それでも私たちには責任が伴います。神に対して自分たちの人生の責任を負うのです。聖書によると、ダビデ王は自分の罪を覆い隠そうとしました。ある兵士を戦いの最前線に立たせることで、その人を殺そうと計画したのです。けれども、預言者ナタンが穏やかながらもダビデの罪を暴くことで、ダビデはそれと向き合うこととなりました。(サムエル記下 12:1-15) そうしてダビデは悔い改め、その悔い改めの祈りを詩編 51 篇で見ることができます。神はダビデの罪を赦しましたが、神はダビデに行動の結果を摘み取る責任を負わせました。ダビデは断食と祈りで神に求めましたが、それでも姦淫の末に授かった息子は死んでしまいました。(サムエル記下 12:15-23) ダビデの息子、アブサロムは父親を殺そうとしましたが、ダビデは逃れ、息子は王座を奪いました。ダビデの息子アブサロムは、最後には戦いで命を落とし、ダビデはエルサレムに戻りました。神はダビデをお赦しになったのですが、それでもダビデの人生は困難の連続でした。

聖書から明らかなことは、神は契約の約束を守られるけれども、神の民は自分の罪の責任を持たされるということです。神は愛するものを懲らしめられます。そして、その懲らしめは罪の深刻さに関係していることが多いのです。どうか私たちが神の御言葉を敬い、キリストの御名にふさわしい人生 (クリスチャン=キリストの者) を生きるべく、聖霊と共に歩める

よう神が助けてくださいますように。私たちの人生はイエスを映し出すものでなくてはならないのです。

## 2. 神は熱心に私たちを守られる (3-5 節)

神はご自身の民を注意深く、熱心に見守られます。離れたところから見守っているのではありません。神の守りは迅速かつ直接的なものです。家が火事になったら、消防署に通報すれば消防士たちが消火にやってきます。もしも家が強盗に遭えば、警察に電話して助けを求めます。ですが、神は消防や警察のようなお方ではありません。神はすでにその特定の状況の中におられ、手厚いケアで私たちを守ってくださっているのです。神は1日24時間そこにおられ、その目は私たちに注がれ、いつでも助ける準備ができています。

この聖書箇所の中には、気に留める価値のある箇所が2箇所があります。

まず3節で、神は私たちの足をよろけさせたり、つまづかせたりしない、とあります。

これはどういう意味なのでしょうか？

山地であったカナンの地では、足を滑らせるということはよくある危険でした。足場を失ってしまうのは簡単だったのです。山道で足を滑らせてしまえば、転んでケガをしまいかねません。滑ってしまいそうになってつかまるものもありませんから、足を折ったりケガを負ったりしてしまうかもしれません。そういった困難な状況こそが、私たちが神に手を伸ばし助けを求める必要がある時なのです。この詩編の中で神は、私たちが神に手を伸ばす時、神はそこに居て、私たちをつかまらせてくださるということを約束してくださっています。詩編 73:18には、悪者はすべりやすい所に置かれると書かれています。けれども、神はご自身の民を足がすべるようなことから守られるのです。クリスチャンも、不注意な選択や行動から、時にすべりやすい道へと迷い込んでしまうことがあります。それにも関わらず、神はそのような時にでも、いつでも手を差し伸べて私たちがすべらないように守ってくださいます。私たちが神に手を伸ばすならば、です。

この聖書箇所にある2つ目の真理は、神は民のための陰であるということです (5 節)

5 節は、神がいかに関心を持って私たちの人生において近くに居てくださるかを思い起こさせてくれます。神は私たちの間近におられるため、その陰が私たちの右側に注ぎ暑さから守ってくれるのです。神は人生において、私たちを怠惰にしまうものや神のために役に立たないことから守ってくださいます。私たちが神に向かってさげすむ時、神はキリストにある信者としての証をダメにしてしまうようなものから私たちを守ってくれるのです。

ヨハネ 10:28 「10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」

## 3. 神はいつでも私たちを守られる (6 節&8 節)

昼とは、私たちが起きて目を覚まし、何であろうといつもの働きに出かける時のことです。そして夜とは、私たちが無力で身動きが取れないような時のことを意味します。

神は私たちが力強い時も、弱い時も守ってくださるのです。6 節では、日と月について触れられています。日とは、私たちが遭遇する「圧倒されてしまいそうな状況」のことを指し、月とは私たちが人生で時に経験する「感情的になってしまうような状況」のことを指しています。誰かに先立たれる時、それは非常に感情的な体験となりますが、もしも、神に手を伸ばすなら神はその経験を通してあなたを助けてくださいます。

私たちは人生でこういった感情的になってしまう体験を多く持つものです。ですが、神はそういった状況の中でも助けることができる方です。私たちが20年くらい前によく歌っていた歌があります。ドン・モーエンという人がかいたもので、歌詞の一部はこのような歌詞です。

「神は、一見すれば道がないように思える場所にでも道を造られる。  
私たちが見えない方法で働かれ、私のために道を造ってくださる。  
神は私を御もとで支え、導いてくださる。  
日々、愛と力をそえて道を造ってくださる。」

詩編に戻りますが、8 節には「神はあなたが行くにも帰るにも守られる」と書いてあります。これは、日々の生活における未知の体験を指しています。

日々外出する時、今日何が起こるのか私たちにはわかりません。けれども、神様はご存知であり、私たちを守ることがおできになるのです。未知の状況はある程度恐れを引き起こすものですが、神がその状況の中でも私たちを守られるということを感じることで、神が私たちの先を行かれ、私たちを守ってくださることに信頼と確信を持つことができます。

モーセが神のための偉大な業に召された時、モーセが気にしたことは、神のご臨在がいつでも彼と共にいることでした。神はモーセを召したような大きなことのために私たちを召されることはないかもしれませんが、何らかのことはするために召されるでしょう。そしてそれが何であろうとも、神が私たちの先を行かれ、道みち神が私たちのために備え、守ってくださることを確信してよいのです。

8 節の最後には、神はどこしえまでも私たちを守ってくださるとあります。

神は私たちの命においても、死においても、死後でさえも守ってくださいます。あなたがクリスチャンであれば、あなたは天においてイエスとの素晴らしい将来を持っています。イエスはここ地上でも、天においてもどこしえにあなたを守ってくださるでしょう。時に、私たちはこの地上での出来事に気を取られすぎて、自分たちが本当は天への途中にいるに過ぎないということを忘れてしまいます。地上は私たちの故郷ではありません。私たちは天に属する者なのです。この新しい国へのビザはイエス・キリストを通して与えられます。

コロサイ 3:2 でパウロはこのように教えています。

コロサイ 3:2 「3:2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」

私たちは天へ行くに分かっているのですから、この旅路がどんなに困難であろうともかまいません。神はこの旅路で、そして永遠の世界でも私たちを守ってくださると約束しておられます。

古い讚美歌にこのような一節があります。

「ああ、この道が我が家への道なら、誰が旅路を気にするだろう」

今、OIC の皆さんの多くが困難な時を迎えていると思います。私も事情を知っていますし、私自身も動揺しています。けれども、神はこの困難の中でもあなたを連れて乗り越えさせてくださり、もし聖書の御言葉にとどまるなら、教会として、個人としてあなたがたは祝福されるのです。困難に遭った時の誘惑は、この大変な状況を抜け出してもっと快適そうで簡単そうに見える場所へと行こうとすることです。けれども、神はあなたがそこを離れることを望まれていません。神はあなたに、この困難な時こそ OIC に留まり、支えてほしいと思っておられます。

私は 36 年前、スコットランドのエディンバラにある教会に出席しました。それはフェイス・ミッション聖書学院に入るための面接があった週末でした。聖書学院に入り、残りの人生をイエスに従うためには、自分の家も、仕事も、安定さえも手放す決意をしなければならなかった状況でした。その教会では、「Pilgrim's Progress <sup>てんろれきてい</sup> (天路歷程)」という有名なクリスチャン書籍を教材として用いて子どもたちを教えていましたが、その時の話のテーマは「脇道に広がる草原」についての警告でした。大きな岩だらけのゴツゴツした道を、巡礼者がまさに旅しようとしているのが描かれたとても大きなポスターがありました。道のわきには、

看板があります。その看板には「脇道に草原あり」と書いてあり、その草原には美しい花々と緑の草、そして美しい山々があるのです。とても魅力的な場所でした。

けれども、その場所は神が巡礼者に旅をして欲しい道とは異なりました。それは、誘惑の場所だったのです。確かに巡礼者は岩だらけの道を行っていました。けれども、その道は素晴らしい町へ行くためには通らなければならない道だったのです。私は泣き崩れました。

神が私に対して語りかけておられると分かったからです。

私は、岩だらけの道を通らないように誘惑されていたのです。けれども神は、天に向かう困難の多い道を旅するように私を召されました。私は、誘惑されて欲望に従うのではなく、神の道に従うという正しい決断をしたことを感謝しています。

今日は、辛抱強く、この困難のある道を歩み続けて決してあきらめないようにと皆さんを励ましたいと思います。神に手を伸ばせば、神はあなたを守り、強めてくださいます。

#### 4. 神はすべてのわざわいから私たちを守られる (7 節)

7 節には十分注意を払わなければなりません。この節は、神が悪いことや苦労が私たちの身に一切起こらないようにされるということではありません。この節が意味することは、神が悪の影響から私たちのたましいを守ってくださるということの意味をしています。

マタイ 10:28 「10:28 からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」

聖書が明確に教えているのは、行くべき場所「天」があり、避けるべき場所「ゲヘナ」があるということです。ゲヘナでは、罪の罰は永遠であり、永遠のわざわいから逃れる方法はありません。けれども、神はクリスチャンのたましいを永遠の罰というわざわいから守ってくださるのです。

#### 結論と応用

詩編の著者は、自分を取り囲む山に目を向け、「私の助けはどこから来るのか」と問いかけています。当時、あらゆる偶像や偽りの神々は山の頂上に置かれていました。こんにちの日本でも、多く神社仏閣は山の上にあります。そういった場所は魅力的な場所で、多くの場合素敵な庭園も備わっています。けれども、神道や仏教は偽りの希望を与えるだけです。

これらは造られた神々であり、聖書の創造主なる神とは異なります。

この神々は人工的なもので、これらが提供するものは、まことの神である聖書の神を信じない邪心から考案された人生の“解決策”だけです。このような神々に従っても、この神々はすべてのわざわいからあなたを守ることはできませんし、あなたのたましいは平安のうちに休まることがありません。それどころか永遠の罰を受け取ることになってしまうのです。

けれども、聖書の神はここで今、そしてとこしえまでもあなたを守ることを約束しておられます。神はあなたのたましいの代価を支払ってくださいました。神は御子イエス・キリストをお送りになり、イエスはあなたの罪のために十字架上で死なれたのです。

もしも自分の罪を認め、イエスに助けを求めるなら、イエスはあなたを赦し、心の中に永久に平安を置いてくださるのです。今日、イエスを信頼しますか？

今日は既にクリスチャンの方がほとんどだと思いますが、そうであれば皆さん、神があなたをいまよりとこしえまでも守られることを信じなければなりません。私たちは信仰で歩むのであって、見えるものによるものではありません。

一人で重荷を負ってはいけません。その重荷を、義をもって私たちを強めて支えてくださる、愛情深く優しい神におささげしなければなりません。

アーメン